

12月 パストラル 加古川

K A K O G A W A



近隣のイベントのご案内



秋冬の特別展 世界のクリスマス
クリスマスを彩る様々な造形を世界各地から集めて、その中に込められたクリスマスの意味を読み解く特別展
今回で35回目を迎える恒例のクリスマス展。ヨーロッパ各地のクリスマスの風習の違いやハロウィンから始まるクリスマス準備のためのカレンダーにも注目して、クリスマス飾りを地域ごとに紹介します。展示総数約1,000点

【期間】10月26日～2020年1月19日
【時間】10時～17時
【入館料】大人600円
【開催場所】姫路市香寺町中仁野 671-3
【会場名】日本玩具博物館
【お問い合わせ】日本玩具博物館
水曜休館（祝日の場合は開館、年末年始は12月28日～1月2日休）
☎079-2322-4388

あまつりオーケストラ

播磨で活動しているアマチュアグループ5バンドが出演します。メインは1970年台のフォークソングです。皆さん、個性と実力を備えた方ばかりです。入場無料です。楽しい会にしたいと思っています。

お時間ある方は、どうぞお越し下さい。

【開催日】12月1日
【時間】13時～16時
【入場料】無料
【開催場所】加古川総合庁舎
【会場名】1階ロビーたばす
加古川駅より徒歩で5分。
【お問い合わせ】ラヴィ・アン・シー 大須賀
☎090-4290-1090



クリスマスチャペルコンサート

毎年恒例のクリスマスチャペルコンサート
今年のゲストは、コスベル歌手 森祐理さんです。

【日時】12月21日（土）
13時～17時開演（13時開場）
【会場】尾上聖愛教会（高砂市松陽4丁目726）
【お問合せ】079-448-4929（教会）
【入場料】500円



『いなみ野万葉の森』のご案内①

新年号「令和」の由来の歌碑が万葉の森（稲美町）にありますのでご紹介いたします。

時に初春の令き月、氣淑く、風和み、梅は鏡前の粉を被き、蘭は桐後の香を重らす
（初春の良い月、気は麗しく風はやわらかだ。梅は鏡台の前の女性が装う白粉のように開き、蘭は身を飾ってお香のように香ってくる）



万葉の森概要

いなみ野「万葉の森」は、稲美町制施行30周年記念事業の一環として企画され、昭和59年に結成された「万葉の森を作る会」の協力を得て、昭和60年度から3ヶ年の継続事業として整備に着手し、昭和63年3月に完成しました。

万葉の森は、約8500平方メートルの敷地内に、縮景式の造園手法により、かつての印南野と印南の海を中心とし形作っており、その中に淡路島、加古川の流れを取り入れ、回遊式日本庭園の趣に仕立てたものです。

四季おりおりの花や木の移ろいさまを見ることが出来ます。園内には印南野万葉歌碑6基を建立し、併せて現代歌人の「万葉の森」賛歌の短歌碑3基を建てています。いずれもこの森に融和して共に、園内散策者の心をいやし、純化し、またくつろぎの空間として、思索を深めてくれるでしょう。

（いなみ野万葉の森冊子より抜粋）

万葉の花（故 中嶋信太郎）

万葉集の中には百数十種以上に及び植物名が詠みこまれている。その上、何植物によらず、たんに花として詠みこまれた歌になるとさらに多く、およそ三百首以上に達する。人はみな美しい花に心引かれる。花は人の心を和ませ、落ち着かせ、時には励まし明るくし、そして人間の心を豊かにしてくれる。花を愛するのは今も昔も変わりはない。わたたくし達は遠い先祖以来、花によって心を潤され、花によってただけ人生の幸福を深く味わって来たことが、それは万葉集中の様々な花の歌によっても知ることが出来る。

万葉の花についてわたたくし達が感ずることは、万葉人たちは、必ずしも花の姿や色や香りについて微細に観察し、それに心をひかれたということではない。目を奪い心を驚かす濃厚な色彩、鼻を突く高い香気などに魂を揺すられたというのではない。色の濃淡、香気の厚薄に拘らず、花と共にあり、花と一体となって生きることを楽しんだのである。一見見栄えのない淡白な花、弱々しい可憐な花の楚々たる姿や色にも深い感動を覚えたのである。

それは、万葉集に詠まれた花に、あしび・うの花・たちばななどは言うに及ばず、百二十首にも及び梅の歌が、ただ一首を除いてことごとく白梅の歌であることからでも察せられるであろう。「あかねさす紫野行き」とか、「紫草のほへる妹を」とか、濃艶なイメージを持った歌にして、そのあかねもむらさきも小さな白い花に過ぎない。つじにしても後世の歌はほとんど赤いのをほめ讃えているのであるが、万葉集ではむしろ白つじを多く讃えているのである。

白い花ではなくても、たとえはすみれのようなものにも夜になっても帰るのを忘れるほど衝撃的な感動を覚えていりし、あの萩にしても、現代人には山萩などに感激するものは少ないであろうが、印南野の萩について次のような名歌を見ることが出来る。

おくれるて われはや恋むむ
稲美野の 秋萩見つ
去なむするゑに

安倍 大夫

この歌の対象は「秋萩見つ去なむ子」であるが、作者の眼にはその人と萩とは一体となっているのである。萩はたんなる背景ではない。その旅人の姿も心も萩と同化し、そして作者もまたそれと一体化し、いわゆる三位一体となって生まれたのはこの歌である。

絶等寸（たゆらき）の 山の峰の上の 桜花
咲かむ春へは 君し惚はむ 播磨 娘子

をみなえし 咲きたる野辺を行き巡り
君を思ひ出 たもとほり来ぬ 大伴 地主

花そのものの観察によって成った花の歌ではなく、花と人と生活が一体となって生まれた歌である。花が美しく人の目を楽しませているというよりも、人は花と共にあることを楽しんでるのである。

所在地 加古郡稲美町国安1286-155
☎&Fax 079-492-3770



十一月の頭の体操の答え

問題

桜にあって梅にない
草にあって木にない
これな〜んだ

答えは餅でした。

桜餅、草餅はありますね